



神野哲夫先生を偲んで

藤田医科大学名誉教授 総合新川橋病院 副院長・脳神経外科顧問

佐野 公俊

慶應義塾大学4年先輩の神野先生に最初にお会いしたのは今から62年前(昭和39年)バレー部に入部した時である。新入生歓迎会で顧問の浅見助教授の隣に座っていた6年生の神野先生は、ひょっとしたら浅見先生よりも偉いのではないかという程にふんぞり返っておられた。その頃はまだバレー部は九人制であり、高校時代にもバレー部に所属していた私と教育大付属出身の鹿島君とはいきなりレギュラーにさせられ、東日本医科大学体育大会で初めて六人制を試験的行った時、六年生だった神野先生も少しだけ試合にでたのを覚えている。その後時々、練習の時にしごきにくるのだがボンとボールを出して触れないとコート1周ウサギ跳びをしてまた3分間のワンマンレシーブ、触るために跳びこむとその頃、東洋の魔女で流行り初めた回転レシーブをしろという。回転レシーブの体制で跳びこむと腰骨を打って、顔面蒼白になるそれでもそんなことを続けさせられて皆、腰に座布団をつけて練習していた。

卒業して脳神経外科に入ると、脳神経外科は紛争の煽りで工藤教授派と戸谷助教授派に分かれており、神野先生は教育担当の工藤教授派におり、私を含め4名の新入局者は診療と研究担当の戸谷助教授側に入ることになる。チーフレジデントを終了し、一旦は大学を離れなければいけない時、行くな大学病院と思っていた私の所に、当時の新設の藤田学園名古屋保健衛生大学に講師として赴任していた神野先生が勧誘に来られ、名古屋に行くことになった。

あれから45年31歳で来た名古屋に、もうすっかり名古屋人になったが名古屋弁はうまく話せない。第一回生のポリクリが始まり、各科病棟が開設された昭和51年のことであった。

手術が好きでかつ得意であった私は、全ての手術を引き受け、夜中もいつでも飛んできて手術に明け暮れていた生活であった。終わると神野先生は皆を食事に連れていってくれて楽しい時代であった。新しいことを考えるのが得意な神野先生に様々なことを教わった。

当時は日本にCTがようやく導入された時で診

断が今までとは一転してしまった。どんな名医の診断よりもCTのほうが正確であった。

治療もようやく日本に顕微鏡手術が導入され、今までの手術成績とは比べものにならない程進化した。診断も手術も根底から変わってしまったのだから脳神経外科は日の出の勢いであった。神野先生はあたらしいことを作り出すのが得意であった。アジア100人を招いての講演会、これが後のアジアコンgresになった。また患者さん向けに脳卒中友の会、後に脳神経外科友の会で現在まで続いている。発案した後はすぐに次のものに目を向け、前のものは、「あれはもう終わった」と言って手のひらを返したように次のことに進むので若手が前に言い出したことの事務的なことをしなければいけないというのが常であった。

いわゆる生粋の慶應であるが故に、いつかは慶応大学教授への野望を抱いておられ、あとの藤田を小生に任せようと考えておられたので教授不在の8年間はツーカーの仲であった。しかし8年間のツーカーの時代があったからこそ何を考えておられるのか手に取るようにわかった。

水上先生と戸谷先生との教授選が延期になって5年、神野先生と戸谷先生との戦いが戸谷先生に決まって、戸谷先生が教授になられた時、それなら次は小生も慶應教授選にと口を滑らせた途端、最大のライバルになってしまい、情報一切が小生の耳にはいらなくなってしまう。その後、戸谷先生が辞めた後の慶応の教授選の時は藤田を辞めてから教授選に出よとの言葉に仕方なく書類を引っ込めた。神野先生と小生の同級生の河瀬先生の戦いとなり、神野先生に軍配が上がりそうな流れが一転して対抗馬に流れてしまい、結果は河瀬君になった。

その後、当時の山路理事長のお考えで神野先生が脳外科主任教授をおりて院長職に就き、小生が脳外科の主任教授になるように言われた時、脳神経外科が病院の稼ぎ頭であることが院長としてやりやすいとわかり、お互いまたいい関係が復活した。先を見越して時代の流れに即した会を立ち上げるこの能力ははずば抜けている。そ

れには足元にも及ばないが小生の得意とする手術腕一筋と表裏のない心で以てこの先歩んでいけたらと神野先生がおっしゃる最終楽章を私なりに刻みたいと思っている。

自宅前で転倒され、藤田に救急搬送されたと聞いた翌日に伺い、毎週お見舞いに行き、やあと手を挙げてくれるまでに回復されたがあっという間に持病の心臓が原因で召されてしまいあっけない別れに驚いた。

ひと、様々な生き方があるのだとあらためて感じ

たが旧名藤田保健衛生大学を世界的に有名にした功績は素晴らしい。天国でも執筆活動に忙しくしておられるかもしれないが安らかに眠っていただきたいと思います。ご冥福をお祈りしております。と以前の会報に寄せたがこうして45周年を迎えることができるのも神野先生はじめ、友の会役員のおかげと感謝したいと思います。

千代子お母様にお会いできたのでしょうか？

私は、困難な手術でも世界中の患者さんを助ける使命を全うするまではまだこの世におります。



神野哲夫先生 追悼文

藤田医科大学ばんだね病院 脳神経外科 教授／統括副院長

加藤 庸子

この度、藤田医科大学医学部脳神経外科名誉教授でありFujita脳卒中友の会創設者の神野哲夫先生が2021年8月6日早朝ご逝去されました。81歳でした。

1940年4月9日に三重県でお生まれになり、わずか1歳のころにお父上様を戦争で亡くし、母一人、子一人で、慶応義塾大学医学部へ入学されました。

藤田学園の総長 藤田啓介先生の陣頭指揮のもと、神野先生は藤田保健衛生大学医学部脳神経外科の初代教授として30代後半で初代教授に就任されてからは、不眠不休状態で外来患者様を徐々に増やし数名しかいなかった時代から200名まで一気に数を増やし、徹底的な患者様第一主義の人生を送られました。

赤髭が目線で、想像を絶するスタミナと多くの国内外の若手脳神経外科医の教育に人生を投じ、かつ人生を謳歌しながら駆け抜けられました。

発展途上国からの留学生医師・看護師を積極的に受け入れ500名以上にも及ぶ留学生同窓生を輩出しました。現在ではその大半が母国での教授や看護長に就任され、世界のリーダーとして活躍されています。藤田保健衛生大学脳神経外科教授、救命救急センター長、病院長を務める傍ら、海外、特に発展途上国への教育活動を熱心につづけてこられました。

先生の人生を我々弟子として垣間見ることで、一人でも多くの患者様の治療、目標を高く掲げ、

最善の道を選ぶ。患者様の心に空いた大きな穴を即刻埋めるなど数々の指導を体得しました。

神野先生がFujita脳卒中友の会を設立された大きな理由は、多忙な医師らはどうしても患者様一人一人と日常生活の状況や本当に不自由に思っていることなど退院された後の生活について時間を多く使って話し合うことができなかったため、その時間や場を確保したいという強い思いがあらわれました。

本会の第1回発足式は、1981年8月29日。神野先生は患者様からのお話を聞き「そうか、こんなに医師に聞きたいことがあったのか」と頭を叩かれた思いであったそうです。

友の会の旅行は、退院後お身体が不自由なために一度も旅行に行くことができなかった患者様の願いを叶えたいという一心から実現したものでした。

友の会会報誌は、会員の皆様との親睦を図り、情報提供の場や患者様からの要望を反映する機会として利用して頂きたいとの思いからでした。

神野先生はいつも患者様に寄り添う姿勢の大切さを教えてくださいました。

大変多くの偉業と功績を残され、我々教室員の進むべき道を開いていただいた神野哲夫先生には心より敬意を表すると共に、安らかなるご冥福をお祈りいたします。